

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Reading into Ethnographic Objects : A Dog Carving Collected from the Former Netherlands New Guinea

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009893

研究ノート Research Note

民族資料を精読する

—旧オランダ領ニューギニアの犬形木製彫像—

山 口 徹*

Reading into Ethnographic Objects:
A Dog Carving Collected from the Former Netherlands
New Guinea

Toru Yamaguchi

博物館や美術館に所蔵される民族資料は、製作されて以降、使用、交換、収集、収蔵、展示の場面を経てきた物質文化である。1つ1つのモノの履歴を精読することは、多様な場面のなかでそのモノが経験してきたさまざまな人やモノやコトとの出会い、そして絡み合いを通時的に読み解くことに他ならない。本稿では慶應義塾大学に所蔵される1体の犬形木製彫像を事例にして、「植民地期に生じた収集の現場」(Gosden and Knowles 2001)の歴史的背景を明らかにする。本資料は、旧オランダ領ニューギニアにおいて、南洋興発株式会社社長の松江春次氏が1930年代前半に入手したものと考えられる。類例資料を探索したところ、オランダの調査隊に参加したファン・ダー・サンデがフンボルト湾の男性宿で1903年に収集した木製彫像に行き当たった。当時の写真を見ると、海岸の汀線に建つ杭上家屋の男性宿で、屋根から突き出る垂木の先端にさまざまな動物意匠の彫像が括り付けられている。特定の氏族と結びつくトーテム動物の彫像であろう。しかし、慶應大資料の形態はファン・ダー・サンデの資料にくらべて写実性が増しており、一見して犬だと分かる。構築された関係性の証として松江氏に譲渡されたというより、短期訪問者への販売目的で製作されていた造形物の可能性が浮かび上がる。今後、旧オランダ領ニュー

*慶應義塾大学

Key Words : museum anthropology, collecting colonialism, Netherlands New Guinea, Humboldt Bay, Haruji Matsue

キーワード : 博物館人類学, コレクティング・コロニアリズム, オランダ領ニューギニア, フンボルト湾, 松江春次

ギニアにおいて 19 世紀末から 20 世紀前半に生じた造形物の形態変化を詳細に検討する必要がある。

Ethnographic objects are of material culture which has experienced various scenes even after production, such as usage, exchange, collection, storage, and exhibition. To read into the provenance of each object is to diachronically scrutinize its encounter and entanglement with people, objects and things in the variety of scenes. This article will explore the historical background of ‘collecting colonialism’ (Gosden and Knowles 2001) through a case study of a dog carving which is now held in Keio University. It is highly probable that this object was obtained by Haruji Matsue, the president of Nanyo-Kohatsu Co., Ltd., in the former Netherlands New Guinea in the 1932. A search for similar objects revealed some statues collected at a men’s house in Humboldt Bay in 1903 by van der Sande, a member of Dutch research team. In a picture taken by him was a stilt house built on the shoreline of the coast, with various animal carvings being tied to the tips of the rafter protruding from its roof. Probably each of them presented a totem animal associated with a particular clan. However, the form of Keio University’s carving is more realistic than those of Van der Sande, and at first glance it can be seen as a dog. It is plausible that the Keio University’s object was a carving made for sale to foreign visitors rather than being gifted to Matsue to show a good relationship with him, while it should be so necessary to examine the variety of physical attributes of ethnographic objects collected from the former Netherlands New Guinea in the end of 19th century to the early 20th century.

はじめに—オセアニア民族資料を精読する

3 類例資料の検討

1 犬形木製彫像の形態特徴

4 フンボルト湾の男性宿を飾った動物彫像

2 収集の経緯

おわりに—収集の現場に思いを巡らせる



写真 1 (a)「オブジェクトリーディング：精読八景」の展示風景（2021年9月10日，筆者撮影）
(b) 左前方から見た犬形木製彫像（2021年7月1日，筆者撮影）

はじめに——オセアニア民族資料を精読する

2021年4月14日，慶應義塾大学の博物館施設である慶應ミュージアム・コモンズ（略称 KeMCo）が開館した。コロナ感染症が猛威をふるうなかで規模を縮小しつつも，初めての実展示「オブジェクト・リーディング——精読八景」が企画され，2021年8月16日から9月17日まで1カ月の会期で開催された。慶應ミュージアム・コモンズを含め，学内の関連8部門から展示資料を集め，領域ご

とに異なるさまざまな研究特性（コンピテンシー）を来館者に感じてもらう企画展であった¹⁾。

文学部の民族学考古学研究室からは、研究室管理の3資料を選んだ。1つは日本最古の埋葬犬骨で、愛媛県久万高原町に所在する国指定史跡「上黒岩岩陰」から出土した2体のうち1号犬の頭骨資料である。もう1つは、岩手県軽米町「君成田遺跡」出土と伝わる縄文晩期ごろの犬形土製品である。そして、国内資料2点に加えて、20世紀前半に旧オランダ領ニューギニア（以下、蘭領ニューギニアと記す）の北西岸で収集された犬形木製彫像を出品した（写真1）。これら由来の異なる3資料を並置することで、時空を超える犬と人の関係性を示唆するねらいがあったからである。

しかし、関係性という視点を拡張してみると、たとえば民族資料なら、製作・使用・交換・収集・収蔵・展示のなかでさまざまな人やモノやコトと出会い、そして絡み合ってきたことに思いいたる。1つ1つのモノが経てきた履歴を精読することは、収集の現場で生じた交渉、西洋の収集者の思惑、現地島民の西洋への眼差し、西洋の前衛芸術による価値付け、西洋の博物館・美術館での展示が引き起こした多様なせめぎ合いといった博物館人類学や歴史人類学研究の基礎作業となるはずである（e.g., Gosden and Knowles 2001; Thomas and Losche 1999; Welsch 1998）。

特にメラネシアを対象とした近年の研究では、19世紀末から20世紀初頭の独領ニューギニアにおける造形物収集の現場が探究されてきている（e.g., Buschmann 2009; 山口 2015）。ドイツ本国では当時、ベルリンやシュトゥットガルト、ライプチヒ、ハンブルグといった都市の民族学博物館のあいだで、独領ニューギニアの珍奇な造形物を求めるせめぎ合いが過熱していた。本国で高まる需要を受け、現地駐在の収集者たちも経済的利益や名誉を求めて、20世紀初頭の10年余りのあいだに多数の造形物を島民から入手した。人頭税による貨幣経済が浸透するにしたがって、造形物の経済的な価値を現地側も認識するようになっていた。共同体の儀礼に用いられていた譲渡しづらい祖霊像もしだいに売り物となり、西洋側の需要に合わせて製作されるようになっていったと考えられる（山口 2015: 420）。とすれば、こうした絡み合いやせめぎ合いのなかで、製作・譲渡する側だった現地島民の視線と思惑を、博物館や研究機関に所蔵される民族

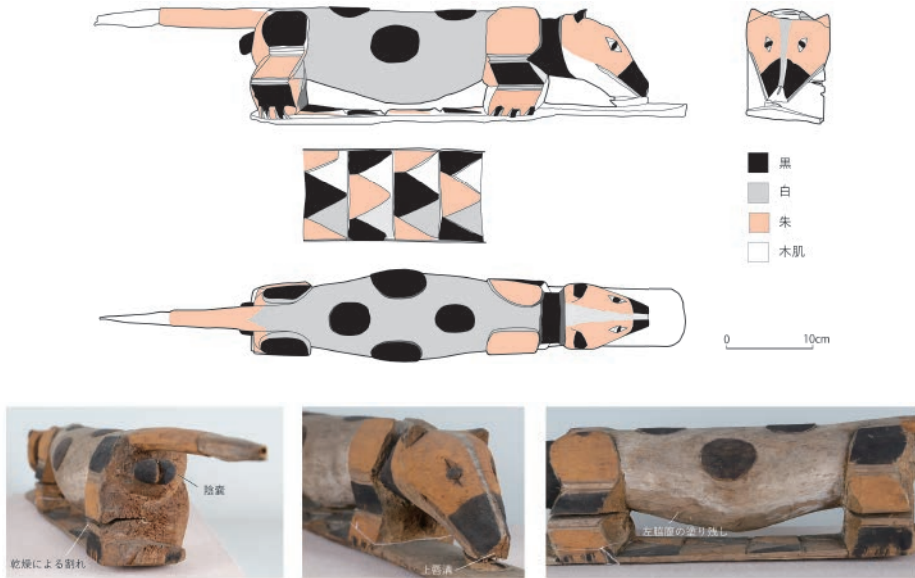


図1 犬形木製彫像の実測3面図と部位写真（3面図：滝川奈々氏実測・筆者トレース，写真：2022年1月8日，筆者撮影）

資料の形態や意匠のなかに読み取ることができるかもしれない（cf. Thomas 1991）。その可能性を意識しつつ，モノの精読のあり方を探るために，蘭領ニューギニアの犬形木製彫像の収集の背景を以下に読み解いてみようと思う。

1 犬形木製彫像の形態特徴

軽軟材を用いた一木造りの犬形彫像である（図1）。細長い台座の上に短足胴長の犬が載るように一体で削り出される。左側の前肢・後肢それぞれの中ほどに，乾燥にともなう深さ約4cmの割れが入ることから，芯材に近い木材から彫出されたと考えられる。最大長68.2cm，幅11.0cm，高さ13.4cmを測り，黒，白，朱（赤）の3種の顔料で彩色される。彩色されていない木肌の色を含めると，4色構成となる。ところどころに黒と白，あるいは朱と白の混色が認められ，場所によっては下塗りとして白色が薄く塗られた後に，黒あるいは朱が塗られた可能性もある。黒，白，朱の3色は，ニューギニアの造形物に一般的にみられる組み合わせで，顔料は木炭，赤土もしくは赤色の樹液，石灰であることが多い。ただ

し、本資料の黒色は塗料の可能性もある。

顔つきは口吻の長い長頭型で、前頭部と鼻梁の区分点である額段（ストップ）は表現されていない。顔全体は朱で彩色されるが、頭頂中央から鼻梁にかけて細長い白斑があり、口吻前端は黒い。頭頂部に彫り出された小さい立ち耳は外側が黒で、内側は朱で彩色されている。鼻先中央の上唇溝が表現されるが、鼻翼部分に外鼻孔は認められない。細長い口唇が 1mm 深ほどの浅い溝で描かれる。顎下は塗り残されて木肌が覗くが、首周りは黒で塗られている。

胸から腹部にかけて樽状に膨らんで湾曲する。前肢・後肢とも左右の間は削り貫かれず、内側は削りが粗い。右腹部は白色顔料で彩色されるが、左腹部は塗り残され、削り出された木肌が露出する。丸みを帯びる頭部や胴体とは対照的に、短く太い四肢は角張り、前肢の肩端や後肢の大腿上部は、接続する胴部や臀部より 5mm ほど高く浮彫りされている。四肢の前面は 3 段に分けられており、幅 2mm ほどの 2 条の溝でそれぞれ区切られる。前肢は上段と中段の境界が後方に、中段と下段の境界が前方に突出し、後肢では逆向きとなり、前肢の肘関節と手根関節、後肢の膝関節と足根関節が表現される。前肢の彩色は上・中・下面が朱・黒・朱に塗り分けられるのに対し、後肢では黒・朱・黒の逆パターンとなる。四肢の下端に、幅 2～4mm、深さ 2mm 程度の短い溝を刻み、そのあいだの残った部分で爪を表現する。右前肢の爪のみ 6 本を数え、他は 5 本で揃う。爪は朱と黒で交互に塗り分けられる。

前肢と後肢のあいだの台座は、三角形が並ぶ 4 段の文様帯で装飾される。浮彫り部は 3 つの三角形からなり、文様帯ごとにたがい違いになるよう黒と朱で塗り分けられている。一段低く彫りくぼめられた逆三角形のうち右側は白で彩色されるが、左側は木肌のまま残る。

尻尾は差し尾で、背と同じ高さで後方にぴんと伸びる。付け根から 3 分の 2 あたりに刻みが施され、そこまで朱色で塗られるが、先端は彩色されていない。尻尾の付け根には黒で彩色された陰囊がある。このことから、雄犬を表現した彫像と推定できる。

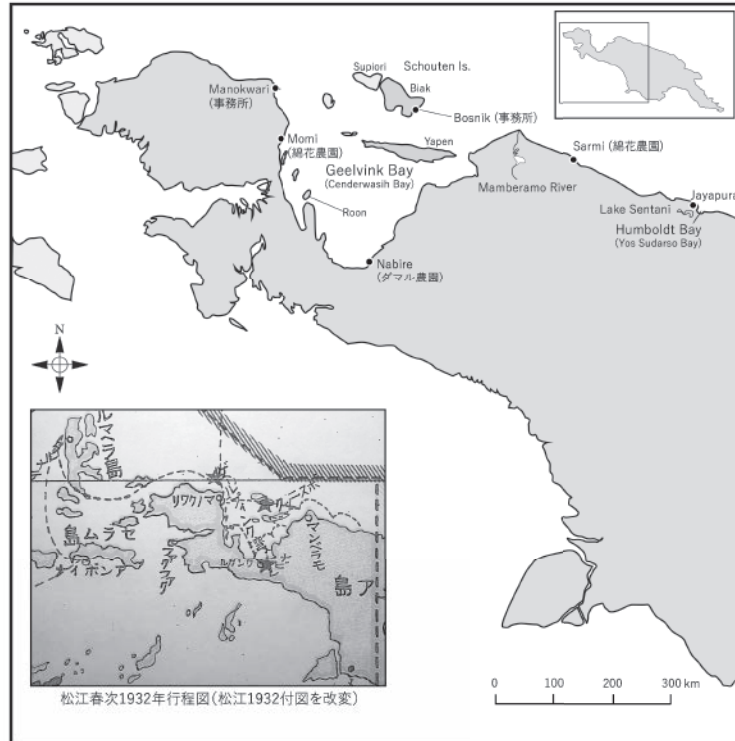


図2 蘭領ニューギニア北西岸の地図と南洋興発合名会社の事業地（筆者作成）

2 収集の経緯

慶應義塾大学には現在、メラネシア民族資料が2,000点近く所蔵されている。その多くは、1921年設立の南洋興発株式会社の活動と関連する。南洋群島で製糖業を中心に多角的な事業を展開した企業で、準国策会社だったと評される（丹野 2015: 29）。初代社長の松江春次氏令息の一郎氏が塾生だった縁で、同氏の民族資料コレクションが終戦直後の混乱期に慶應義塾大学に運び込まれた（臺 2020: 43; 山口 2015: 421-422）。

これら松江コレクションの資料は1936年に、南方民族学に関心をもつ在京の若手研究者らが結成した研究会「南の會」によって整理され、その図録である『ニューギニア土俗品圖集』上巻が1937年、下巻が1940（南の會1940）年に刊行された。本稿で取り上げる犬形木製彫像は、木彫犬（No.1065）として上巻に

掲載されており、収集地は「蘭領ニュー・ギニア北西海岸」とある（南の會 1937: 126, 第 56 図版）。

南洋興発は設立 10 年を迎えた 1931 年を機に、サイパン、テニアン、ロタ、パラオ、ペリリュウ、ボナベ、トコペイといった南洋群島から、さらに赤道を超えて蘭領ニューギニアへ事業を拡大した（武村 1984: 81）。現在のニューギニア島西半分で、インドネシア領パプア州および西パプア州にあたる。当時ゲールフィンク湾（Geelvink Bay）と呼ばれたチェンデラワシ湾（Cenderawasih Bay）でダマル（ダマール）樹の樹脂採取業を営んでいたドイツ企業のフェニックス開墾会社が経営に行き詰まり、売りに出された経営権を南洋興発が一括購入し、南洋興発合名会社を立ち上げた（松江 1932: 234-239; 南洋興発株式会社 1935: 31-34）²⁾。幅 400km、奥行き 250km を測る巨大なゲールフィンク湾の西岸入口に位置するマノクワリ（Manokwari）に拠点の事務所をおき、湾奥ナビレ（Nabire）におけるダマル樹脂採取業を継承した（図 2）。さらに 1933 年から 1935 年には、マノクワリから東に約 530km のニューギニア北西岸に位置するサルミ（Sarmi）とゲールフィンク湾西岸のモミ（Momi）に広大な綿花農園を開設し、ナビレ、サルミ、モミの 3 カ所合計で約 3,200 名の現地島民を雇用していた。

ニューギニアでの事業開始の翌年にあたる 1932 年 7 月から 9 月にかけて、社長の松江春次氏自らが蘭領ニューギニアへ視察に赴いている。行程図をたどると、その往路は、横浜からパラオにいたる定期船の航路をマノクワリまで延長してもらい、そこからは社用帆船を使ってゲールフィンク湾内を反時計回りにまわり、モミやナビレを視察した後、湾東のマンベラモ川（Mamberamo River）河口を超えて北西海岸沿いにサルミに至り、おそらくはさらに東進して、その先のフンボルト湾（Humboldt Bay）にまで足を伸ばした（松江 1932）。この視察の過程で数多くの民族資料が収集されたと考えられる。

慶應義塾大学所蔵の蘭領ニューギニア資料には、もう 1 つの資料群がありうる。南の會の主要メンバーで、『ニューギニア土俗品圖集』の刊行を主導した慶應義塾大学文学部東洋史学専攻の松本信廣教授による収集品である。松江コレクションの資料整理・図集刊行に携わった南の會の数名が南洋興発の支援を得て、南洋群島の調査旅行を計画し、1937 年 7 月 12 日に横浜を出港した（松本 1937）。パラオに到着した松本教授は、現地駐在の慶應出身者による歓待（パラオ初の三

田會)を受け、その席上で南洋興発の松江一郎氏からニューギニア同行を勧誘された。こうして、南の會から参加した同行者をパラオに残し、7月27日に南洋興発の社用船ヌシ丸でニューギニア視察に向かい、7月31日にマノクワリに入っている。1週間ほどの滞在中に同教授は、マノクワリ周辺の島民から「サゴの匙とか土器、木器、箸など」(松本 1937: 97)を入手している。また、南洋興発現地駐在社員だった天羽兵太郎氏から、フンボルト湾周辺の収集品を一括寄贈されたことが記録に残されている³⁾。

天羽氏のコレクションには、現在のジャヤプラ (Jayapura) にあたるホランダ (Hollandia) やスコ (Sko) の人々が使用していたヒョウタン製とヘチマ製のペニスケース、センタニ湖 (Sentani Lake) 北岸イファル (Ifar) の長槍、現在のヨス・スダルソ湾 (Yos Sudarso Bay) にあたるフンボルト湾エングロスの大石斧が含まれていた。松本教授が持ち帰ったこれらの資料は、1937年11月20日～22日に三田史学会が慶應義塾図書館と共催した「原始及古代文化資料展覧會」で展示されたことが分かっている (三田史学会 1938)。この展覧会では、日吉加瀬山古墳群と矢上古墳の国内発掘資料が主要展示品だったが、南洋興発からの出品資料を含めてニューギニアの民族資料も並べられた。

松本教授は、南の會の調査旅行を記録した「南洋群島旅行日誌」のなかで、オセアニアの島々の研究がクレイマーやミュラーといった西洋の研究者によって活発に進められている状況と比較して、日本の研究者による民族学的研究や民族資料の収集がまだまだ十分ではなく、情報や資料を集積する民族学博物館の設備もないと記している (松本 1937: 77)⁴⁾。それゆえ、調査旅行や展示の背景には、南洋群島の民族学的研究や資料収集を日本において促進する企図があったと見てよい。

ただし、「文化資料展覧會」の出品目録には犬形木製彫像は含まれていなかった。そもそも、1937年春刊行の『ニューギニア土俗品圖集』(上巻)に所収される資料だから、南の會が整理を始めた1936年春以前の収集品ということになる。それゆえ、松本教授を通して寄贈された天羽コレクションではなく、松江春次氏が蘭領ニューギニアに赴いた1932年の視察の際か、あるいはその後4年ほどのあいだに南洋興発の現地社員によって収集されたものと考えてよい。何れにしても、南洋興発の事業展開のなかで1930年代前半に蘭領ニューギニアで数多くの



図3 ファン・ダー・サンデが1903年にフンボルト湾で収集した彫像類の多色刷り図版 (Wikimedia Commonsの著作権フリー画像データに資料番号を追記)

民族資料が収集されたことは間違いない。

3 類例資料の検討

すでに触れたように『ニューギニア土俗品圖集』(上巻)には、犬形木製彫像について「蘭領ニュー・ギニア北西海岸」とあるだけで、収集地の詳細は不明である。類例資料も長らく見つけれなかった。しかし、欧米各国の博物館美術館で開催されてきたオセアニア民族資料展の展示図録を収集する過程で、米国カリフォルニア在住の美術商マイケル・ハムソン氏 (Michael Hamson) と知り合った⁵⁾。オセアニア、特にニューギニアの造形物を扱う美術商である。同氏に相談したところ、石版刷りの図版を紹介された (図3)。

オランダの軍医だったファン・ダー・サンデの報告書に掲載された1枚であ

る。1903年に実施された蘭領北部ニューギニア調査に参加し、形質人類学と民族誌の調査を担当した人物で、ゲールフィンク湾とファンボルト湾、そしてファンボルト湾に近接するセンタニ湖沿岸の調査を実施した (van Duuren 2011: 32)。図版にのる犬形木製彫像2体 (No. 560, 563) については次の記述が残っている (van der Sande 1907: 151, Plate 19)。また、同図版には豚形木製彫像2体 (No. 561, 562) も掲載されているので、参考情報として以下に併記する。なお、() 内は本稿筆者の追記である。

No. 560 : (収集地) ワバ [Waba]。

犬形木製彫像。刻まれた眼部、立ち耳、二重沈線の口唇をもつ。肩と腰は胴部より一段高く、胴部には両側に眼球状の模様が付く。尻尾の中ほどに一周する刻み目があり、(付け根に) メスの生殖器が認められる。円筒状の細長い柄が(顔側に) 付き、眼球のような模様が施される。柄部は、掘り下げられた地の部分が白、浮彫りされた図の部分は黒あるいは朱で彩色される。No. 557 資料と同じように取得 (男性宿で収集)。屋根飾りか？

No. 563 : (現地名) ジョグ [Jogu]。(収集地) ワバ。

犬形木製彫像。切れ込み型の耳。(中央に円形の虹彩部を配し、) 三角形を(両側から) 組み合わせた眼球表現。沈線の口唇に、歯牙が付く。背には縦じまが刻まれ、前肢は一段高く浮彫りされ、尻尾は横縞で飾られる。(尻尾の付け根に) 陰囊あり。彫られる前に(火であぶって) 焦がした材表面は黒く、交互になるように朱色が施されている。No. 557 資料と同じように取得 (男性宿で収集)。

No. 561 : (現地名) オボ [Obo]。(収集地) ワバ。

豚形木製彫像。耳は浮彫りされ、口唇は長く刻まれ、上顎前部(口吻)は平たい。胴部は樽型に削り出される。包皮状の陰茎が付く。肩と腰は一段高く浮彫りされ、前肢・後肢とも左右の間は削り貫かれず、削り出された板状の台につながる。差し尾で、垂れ下がる。削られた凹部は白で彩色され、その他の部分は朱色が施されるか、黒く焦がされる。No. 557 資料と同じように取得 (男性宿で収集)。

No. 562 : (現地名) オボ。(収集地) ワバ。

No. 561 と同様に緩めに差し込まれた (?) 耳をもち⁶⁾、臀部(胴部)には縦縞の



図 4 フンボルト湾周辺地図 (筆者作成)

模様が施され、生殖器は付かない。前肢は肩を回って左右がつながり、後肢も腰を回って左右がつながる。削り出された板状の台に四肢と下顎がつながる。朱、黒、白で彩色される。葦の繊維で作った持ち運び用の輪が付く。

図 3 に描かれた犬形木製彫像は、彫り込みあるいは浮彫りの耳部が側頭部に付き、一見するとトカゲのようだが、現地の人々はファン・ダー・サンデに犬だと説明した (van der Sande 1907: 146)。特に、陰囊が付く彫像は犬で、豚の彫像は鼻先に筒状の突起が付くとのことである (van der Sande 1907: 148)。犬か豚かにかかわらず、細長い板状の台が付くこと、胴長で短足であること、前肢の肩端や後肢の大腿上部は胴部より一段高く浮彫りされていること、犬形彫像は水平に伸びる差し尾で、中ほどに刻みが付くこと、No. 562 (豚形) を除く 3 体は四肢の下端に短い溝状の刻みを入れて爪が表現されることが、慶應大所蔵の犬形木製彫像の特徴とよく一致する。

4 フンボルト湾の男性宿を飾った動物彫像

ファン・ダー・サンデの報告書に載る 4 体は何れも、蘭領ニューギニア東端に位置するフンボルト湾内のワバ (Waba) で収集された。フンボルト湾の中ほど



写真2 ファン・ダー・サンデが撮影したフンボルト湾トバティ集落の海岸線に建つ杭上の男性宿。割竹を敷きつめたテラス状の張り出しで男たちが踊っている。その後ろに写る男性宿には、草葺き屋根から突き出る垂木の先端に動物意匠の彫像が複数種類認められる。写真左上（丸囲い）の像は犬形彫像に見える。（ロッテルダム国立世界文化博物館提供）

には、隆起した石灰岩の岬が西岸から突き出し、それにむかって東岸から細長い砂嘴が伸びており、これによって外海に開いた外側と砂嘴の内側に水域が分かれる。西からの岬と砂嘴のあいだに狭い水道が開き、船舶はそこから内水域に入ることができ、現在はその上に巨大なホルテキャンプ橋（Holtekamp Bridge）が架かる。内水域はヨテファ湾（Yotefa Bay）と別称される。オランダ北部ニューギニア調査隊を率いたドイツ人地質学者ウィッチマンの報告書には、ワバ（Waba）もしくはワワ（Wawah）と呼ばれる村落に、現在もあるナフリ（Nafri）という別名が記されている（Wichmann 1910: 102）。ナフリは、ヨテファ湾の南東岸に位置する村落であり、ファン・ダー・サンデの犬形木製彫像はここで収集されたことになる（図4）。

ところで、ファン・ダー・サンデはフンボルト湾で岸辺近くの汀線に建つ大型杭上家屋をいくつか実見するとともに、写真を撮影した（van der Sande 1907: 290-292, Fig. 198）。それによると、八角形をなす草葺きの大屋根が数段重なり、尖塔状にそびえる構造で、建物の横には割竹張りの広場が接していた。砂州の対

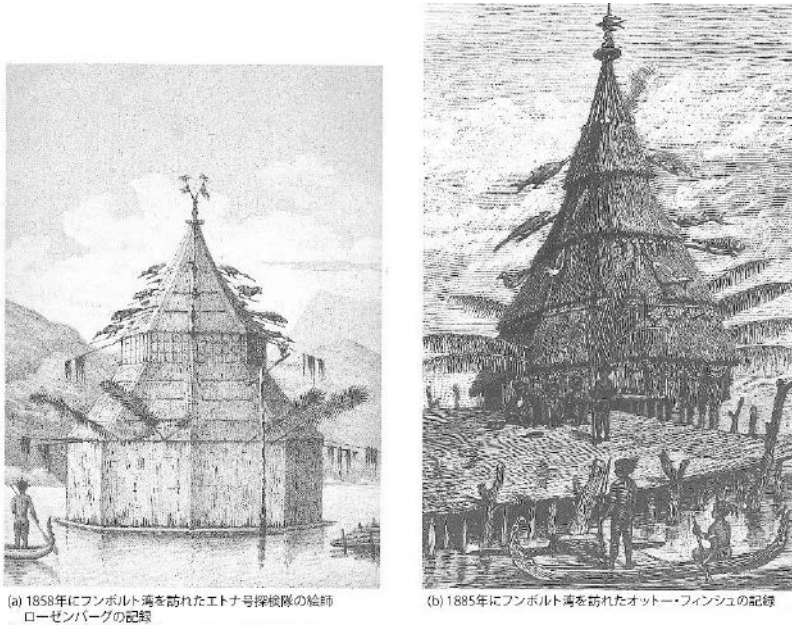


図 5 19 世紀後半に記録されたトバティ村の男性小屋
(Kooijman and Hoogerbrugge 1992: Fig. 2, 3 を転載)

岸にあったトバティ (Tobati) 集落の写真には、着飾った男たちが集まり、割竹張りの広場で踊る様子が写っている (写真 2)。室内の囲炉裏の上には、儀礼で使い込まれた大型の手持ち太鼓がたくさん吊るされており、どれも美しい彫刻で装飾されていた。太鼓を吊るす紐にはカンガルーの頭蓋骨が数多く連なっており、儀礼にともなう饗宴の名残であろう。囲炉裏の上に吊るされた編み籠のなかには小型の竹笛が数本入っており、中央の柱に巻かれた樹皮布には竹製の長笛が差し込まれていた。男たちが使う漁労網も柱に掛けられていた。フンボルト湾西岸沖の島カジョ・エニサウ (Kajo Enisau) の建物内部には炉が 2 つ切られていた。床には木製の枕が並び、座る場所には樹皮布が敷かれ、床は清潔に保たれていた。

ファン・ダー・サンデによると、室内で大声を出す者はなく、みな囁くように話していたという (van der Sande 1907: 292-294)。檳榔樹の実を噛むときは、竹張りの継目から床下に唾を吐き捨てていた。建物は無人になることがなく、特にたくさんの若者たちが寝泊まりしていた。彼らは割礼前の少年期から思春期を過

ぎるまで家族から離れて共住し、村の首長 (hamadi) の監督のもとでさまざまな仕事をさせられた。糸を撚って漁労網を作り、木像を彫って彩色し、狩猟や集団漁にも参加した。建物は女人禁制で、若者たちの日中の活動が女性や子供たちの目に触れないように集落から離れた場所にあり、ヤシ葉を張った柵で周りを囲われていた。

ファン・ダー・サンデは尖塔屋根をもつこうした建物を、そこで行われた歌唱と舞踏をとまなう儀礼に着目し、精霊を祀るためのテンプル (temple) と記したが、上記の特徴から男性宿もしくは若者宿だったと考えてよい (Greub 1992: 58)。しかし、本稿にとってもっとも重要な特徴は、草葺き屋根から突き出る垂木の先端にある。1858年にフンボルト湾に投錨したエトナ号探検隊や、1885年に同湾を訪れたオットー・フィンシュ (Otto Finsch) も同様の建物を報告している (Greub 1992: 57-58)。同行絵師たちが残したスケッチの銅版画をみると、草葺き屋根から突き出る複数の垂木の先に、四足動物や鳥、魚の彫像が描かれている (図5)。先に示した写真2の左上を詳しく見ると、差し尾を真横にピンと伸ばした動物彫像が写っている。ファン・ダー・サンデがワバ (ナフリ) で入手した犬形木製彫像は、男性宿の垂木先端に結びつけられる装飾だったとみてよい。これらの彫像の意味はよく分かっていないが、特定の氏族と結びつくトーテム動物を表現した造形物だったのかもしれない (cf. Smidt 2011: 25)。

おわりに——収集の現場に思いを巡らせる

慶應義塾大学所蔵の犬形木製彫像は、松江春次氏の蘭領ニューギニア視察にもなつて収集された可能性がある。同氏が出版した『南洋開拓拾年誌』には記載は無いが、行程図に描かれた破線はニューギニア北西岸沿いで2カ所に立ち寄ったことを示している (松江 1932)。地図上の位置から、サルミとフンボルト湾と考えてよい。サルミは、南洋興発合名会社運営の綿花農園があった場所である。フンボルト湾はまさに、ファン・ダー・サンデが1903年にワバ集落 (ナフリ) の男性宿で犬形木製彫像を入手した土地である。松江氏一行も、蘭領ニューギニアの拠点だったホランディア (現在のジャヤプラ) に立ち寄り、さらには内水域のヨテファ湾内を巡りながら民族資料を手に入れたのかもしれない。慶應大の犬

形木製彫像とファン・ダー・サンデの収集品との多くの共通点は、そんな状況を連想させる。

ところで独領ニューギニアでは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて西洋による造形物の収集熱が高まっていた (Buschmann 2009; 山口 2015)。当初は、現地に赴いた貿易商人や現地駐在官吏、宣教師らが中心となって収集し、数多くの資料が西洋の民族学博物館に寄贈・売却された。さらに 20 世紀の最初の 10 年には、博物館のキュレーターや民族学者が資料収集に加わっていった。松本教授が「南洋群島旅行日誌」のなかで、パラオの「浩瀚な報告書」の著者として紹介したアウグスティン・クレイマー (Augustin F. Krämer) はその一人である (松本 1937: 77)⁷⁾。

蘭領ニューギニアのフンボルト湾の造形物も、19 世紀中ごろからオランダを中心とする西洋の民族学博物館の収蔵庫に加えられてきた (Duuren 2011; Greub 1992; Webb 2011)。特に、モルッカ諸島バンダ駐在の官吏だったファン・ダー・フォース (H.D.A. van der Goes) が 1858 年にフンボルト湾周辺を調査して以来、ドイツの民族学者オットー・フィンシュ (Friedrich H. Otto Finsch) による 1885 年調査、モルッカ諸島テルナテ駐在の最高官吏だったデ・クラーク (Frederik S.A. de Clercq) による 1887 年・1888 年の調査と続き、デ・クラークの収集品はライデン民族学博物館に送られたことが分かっている。1893 年には、ユトレヒト伝道協会によってゲールフィンク湾 (チェンデラワシ湾) ルーン島 (Roos) に派遣されていたピンク宣教師 (G.L. Bink) がフンボルト湾に近接するセンタニ湖を初めて縦断調査した。

ファン・ダー・サンデの収集活動もその延長線上にある。彼は手持ち太鼓と竹笛の入手について短い記述を残している (van der Sande 1907: 305)。手持ち太鼓の 1 つはトバティ集落の男性宿にあったもので、長いあいだ秘密裏に交渉を重ねて入手したとある。交渉相手は分からないが、おそらくは村の首長だったのではないか。センタニ湖のアセイ集落 (Asei) では、手持ち太鼓の価値が音質にあることを示すために、男たちが実際に叩いてみせてくれたので、ファン・ダー・サンデはお返しに 2 本の鉄製斧を打ち合わせて鳴らし、この音が好きか訊ねてみた。すると、笑いが起こって交換が成立したという。竹製の長笛は儀礼に使用される重要な楽器で、女性が触ることや、女性の目に触れることは禁忌となってい

た (van der Sande 1907: 294)。ファン・ダー・サンデは男性宿で開かれた饗宴に参加し、歌や踊りに加わることは許されていたが、竹笛は村の首長によって厳重に管理され、なかなか手に入らなかった。しかし、ジャヤプラの西に位置する北岸沿いの集落ナチャイバ (Nachaiya/Nacheiba) を訪れたとき、手持ちの体温計を入れていた硬質ゴム製の筒を吹いて、高音を鳴らしてみせたところ、交換が上手くいったとある (van der Sande 1907: 296)。これらの記述から、20世紀初頭のフンボルト湾周辺では貨幣経済がまだ浸透していなかったことが分かる。そして、手持ち太鼓や竹笛は調査のなかで築かれた現地社会との良好な関係を通して、バーター交換によってようやく手に入る資料だったのであろう。残念ながら、木製犬形彫像や豚形彫像の入手については情報が無い。しかし、少なくとも若者たちが共住する男性宿を飾っていた造形物であり、手持ち太鼓や竹笛と同様に集団の共有財だったと考えられる。

ファン・ダー・サンデによる1903年の民族学・人類学的調査以降は、宣教師や行政官、旅行者もこの地域を訪問するようになり、多くの民族資料が漁られていった⁸⁾。さらには、フランスの探検家で美術商でもあったジャック・ビオ (Jacques Viot) が1920年代にセンタニ湖で民族資料を収集し、幾何学的な紋様で飾られた造形物やその写真を発表すると、ブルトンやエルンスト、レイといったシュルレアリストたちの眼を釘付けにした (Webb 2011: 14)。南洋興発による蘭領ニューギニアの開発はまさにこの時期にあたる。松江氏や南洋興発の現地社員、そして南の會の松本教授による収集活動にも、こうした西洋の潮流が影響していたと考えられる。

しかし他方で、20世紀前半に本格化していったオランダの植民地経営は、賦役、人頭税、貨幣経済、そして間接統治によって大きな影響を現地社会に及ぼしていた。キリスト教の布教活動にともなって20世紀初頭には男性宿の多くが放棄され、1920年代中ごろには、センタニ湖畔に残っていた尖塔屋根の大型男性宿3棟も宣教師の働きかけで燃やされたという (Smidt 2011: 25)⁹⁾。貨幣や物品、教会、学校などに依存した生活へ急激に変化していくなかで、西洋に搾取されているという不満が現地の社会不安を助長していた。バタビアにあったオランダ総督府の記録や宣教師の報告から、貿易商人や宣教師を襲撃する武装蜂起が頻発し、いわゆるカーゴ・カルト運動も1920年代に各地で発生していたことが分

かっている (Grazia-Rizzo 2004: 284-286)。

カーゴ・カルトとは、西洋の豊かな物品 (カーゴ) を汽船に満載して自分達の祖先が帰還し、信ずる人々に富を分配するという予言に端を発する宗教的社会運動の総称で、ニューギニアを含むメラネシア社会から数多くの事例が報告されている (ワースレイ 1981)。植民地支配への抵抗でありながら、たとえば祖霊とつながるために無線機の模倣品を作り、神々を見るために懐中電灯を照らし、聖書のなかにカーゴの秘密を求めるなど、西洋からもたらされた物品や知識を運動に借用／転用する傾向を示す。そして、既存の伝承と聖書の内容を習合しながら、古老たちの伝統的権威を否定し、昔ながらの生活を破壊するといった、一見すると相反する特徴を往々にしてもつ。それは、西洋との出会いによって引き起こされた大きな社会変動に対する人々の (特に若い人たちの) 理解と対応のあり方と解釈できる。

こうした時代背景を踏まえると、たとえば松江春次氏が収集した犬形木製彫像が、男性宿や氏族といった共同体にとっての社会的意味を担い、それゆえに時間をかけて構築された関係性なしには交換されない譲渡しづらい贈物 (less alienable gifts) だったのか疑問に思えてくる (cf. Thomas 1991: 14)。むしろ、個々人の裁量で容易に販売できるものとして、ときに片手間に作られた品物だったのではないだろうか。ファン・ダー・サンデの収集品に比べて写実的で、一見して犬だと分かること、ニューギニアの造形物によく見かける眼球状の模様ではなく、ダルメシアンのような黒の丸ブチ模様が白い胴部に付けられていること、四肢の内側や台座が粗削りなこと、腹部や顎下が塗り残されていることに、短期訪問者に向けていた現地の人々の眼差しが垣間見られるように思う¹⁰⁾。

もちろん、だからといって資料価値が低いわけではない。旧オランダ領ニューギニアにおいて 19 世紀末から 20 世紀前半に生じた造形物の形態変化を詳細に検討することによって、収集の現場の激変にせまれる可能性があるからだ (cf. 山口 2015: 421)。慶應義塾大学所蔵の犬形木製彫像はたった 1 つの資料だが、それでも興味は尽きない。博物館に所蔵されるモノの精読は地道な作業だが、その先には思いもよらない出会いと絡み合い、そしてせめぎ合いの歴史が広がっている。

謝 辞

犬形木製彫像の精読機会をつくっていただいた慶應ミュージアム・commonsの渡辺洋子先生、本間友先生に感謝いたします。臺浩亮氏にはいくつかの重要な文献資料を紹介いただき、瀧川奈々さんには犬形木製彫像のスケッチ図版を作成いただきました。また、査読をいただいた3名の方々に貴重なご唆をいただきました。御礼申し上げます。

注

- 1) 博物館・美術館に収蔵される資料は多様なだけでなく、それぞれを扱う専門領域によって分析手法や解釈の仕方もさまざまである。個々の分野に特有の研究特性（コンピテンシー）があることを明示し、相互に認識し合うとともに、来館者のさまざまな思考をそこにかけ合わせてもらうフォーラム的な展示が目指された。
- 2) ゴムの木と同様に、ダマルの樹皮に切り込みを入れて染み出た樹脂を採取する。ダマル樹脂は、飛行機や船舶船底などの塗料原料、蓄音機のレコード、電気の絶縁材などに用いられた。南洋興発合名会社はナビレ奥地、ワンガル川河口より30km上流の川岸沿いに31,000町歩余りのダマル林を有していた（南洋興発 1935: 32）。農園で栽培されていた樹木は、ナンヨウスギ科ナギモドキ属の高木と思われる。
- 3) 天野兵太郎氏は、1938年にはスラウエン島のメナドに移り、南洋興発の関連会社であったセレベス興業に在籍したことが分かっている。（「メナド在留邦人名簿」<https://japan-sulawesi.net/manado/minahasa2.html>, 2021年10月18日閲覧）
- 4) クレイマーはドイツの民族学者アウグスティン・クレイマー（Augustin F. Krämer）、ミュラーはドイツの民族学者ウィルヘルム・ミュラー（Wilhelm Müller）のことで、ハンブルグ民族学博物館によるオセアニア調査に参加し、バラオとヤップの民族誌を残した（Krämer 1929; Müller 1918）。
- 5) マイケル・ハムソン氏は、オセアニック・アートというウェブ・ギャラリーを開設している。<https://www.oceanicart.com/>（2021年10月18日閲覧）ファン・ダー・サンデの報告書に掲載される図版を教えてもらった（van der Sande 1907: Plate 19）。画像データは、Wikimedia Commons からダウンロードした。（[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nova_Guinea_-_Vol_3_-_Plate_19_\(cropped\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nova_Guinea_-_Vol_3_-_Plate_19_(cropped).jpg), 2021年10月18日閲覧）
- 6) 'ears loosely inserted' と表現されているが、図版からはその特徴を判断できない。
- 7) もともとは軍医だったが、1890年代中ごろから1911年にかけて独領ミクロネシアやニューギニアへの5回の調査航海へ参画し、オセアニア文化への関心を高めた民族学者でもある。サモアやバラオの民族誌を著した研究者として良く知られる。クレイマーが途中から率いた「ハンブルグ南洋調査（Hamburg Südsee-Expedition）」は、1908年から1910年にかけて独領ニューギニアとミクロネシアのカロリン諸島やマーシャル諸島を汽船パイホ号でめぐり、総数17,000点以上の民族資料を収集したと伝わる（Mönter 2010: 182）。
- 8) たとえば独領ニューギニアでは、20世紀最初の10年のあいだに、造形物が品薄になってしまっていた。1904年にニューアイルランド島を旅したパーキンソンは、マランガン彫刻がほとんど無くなってしまったと記している（Buschmann 1996: 202）。
- 9) このとき現地の人々は、男性宿にあった造形物や彫刻された柱を守るために密かにセントタニ湖に沈めたという。そのうちのいくつかは、スイスの民族学者ザーツ（Paul Wirz）やフランスの探検家ヴィオ（J. Viot）によって後に回収された（Smidt 2011: 25）。
- 10) 1955年にオランダ語で出版されたファンボルト湾の民族誌に、動物を模した木製彫像が掲載されている（Galís 1955: Fig. 33）。その形象はファン・ダー・サンデの豚形木製彫像に似るが、キャプションには「カヌーの船尾飾り」とある。キリスト教の布教にともなって男性宿が廃棄された後も、動物の木製彫像が個々人のカヌー装飾として生き残っていた可能性がある。

参 照 文 献

〈日本語〉

- 臺浩亮
2020 「植民地期のニューギニアにおける小嶺磯吉の活動に関する予察——1905年から1911年における収集活動を中心に」『史学』89(3): 1-52。
- 武村次郎
1984 『南興史（南洋興発株式会社興亡の記録）』東京：南興会。
- 丹野勲
2015 「戦前日本企業の南洋群島進出の歴史と戦略——南洋興発, 南洋拓殖, 南洋貿易を中心として」『国際経営論集』49: 13-36。
- 南洋興発株式会社
1935 『南洋開拓と南洋興発株式会社の現況』東京：南洋興発株式会社（2017（復刻）『社史で見る日本経済史（植民地編第7巻）——裏南洋開拓と南洋興発株式会社（1925）・南洋開拓拾年誌（1932）・南洋開拓と南洋興発株式会社の現況（1935）・南洋興発株式会社二十周年（1941）』東京：ゆにま書房）。
- 松江春次
1932 『南洋開拓拾年誌』東京：南洋興発株式会社。
- 松本信廣
1937 「南洋群島旅行日誌——サイパン・ヤップ・パラオ・ニューギニア」『史学』16(3): 77-109。
- 三田史学会
1938 「彙報——原始及古代文化資料展覧會」『史学』16(4): 189-199。
- 南の會
1937 『南洋興発株式会社蒐集——ニューギニア土俗品圖集』（上巻）東京：南洋興発株式会社。
1940 『南洋興発株式会社蒐集——ニューギニア土俗品圖集』（下巻）東京：南洋興発株式会社。
- 山口徹
2015 「ウリ像をめぐる絡み合いの歴史人類学——ビスマルク群島ニューアイルランド島の造形物に関する予察」『史学』85(1-3): 401-439。
- ワースレイ, P.
1981 『千年王国と未開社会——メラネシアのカーゴ・カルト運動』（文化人類学叢書）吉田正紀訳, 東京：紀伊国屋書店。

〈外国語〉

- Buschmann, R. F.
1996 Franz Boluminski and the Wonderland of Carvings: Towards an Ethnography of Collection Activity. *Baessler-Archiv, Neue Folge*, Band 44: 185-210.
2009 *Anthropology's Global Histories: The Ethnographic Frontier in German New Guinea, 1870-1935*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Galis, K. W.
1955 Van de Humboldt-Baai: Bijdrage tot een ethnografie. Den Haag: J. N. Voorhoeve.
- Gosden, C. and C. Knowles
2001 *Collecting Colonialism: Material Culture and Colonial Change*. Berg: Oxford International Publishers Ltd.
- Grazia-Rizzo, S.
2004 From Paradise Lost to Promised Land: Christianity and the Rise of West Papuan Nationalism. Ph.D. (history) Dissertation, University of Wollongong.
- Greub, S.
1992 *Art of Northwest New Guinea: From Geelvink Bay, Humboldt Bay, and Lake Sentani*. New

- York: Rizzoli International Publications.
- Kooijman, S. and J. Hoogerbrugge
1992 Art of Wakde-Yamna Area, Humboldt Bay, and Lake Sentani. In S. Greub (ed.) *Art of Northwest New Guinea: From Geelvink Bay, Humboldt Bay, and Lake Sentani*, pp. 57-126. New York: Rizzoli International Publications.
- Krämer, A. F.
1929 *Ergebnisse der Südsee-expedition 1908-1910: Palau* (herausgegeben von Dr. G. Thilenius, II. Ethnographie: B Mikronesien, Band 3). Humburg: L. Friederichsen.
- Mönter, S.
2010 Dr. Augustin Kramer: A German Ethnologist in the Pacific. Ph.D. Thesis, University of Auckland.
- Müller (Wismer), W.
1918 *Ergebnisse der Südsee-expedition 1908-1910: Yap* (herausgegeben von Dr. G. Thilenius, II. Ethnographie: B Mikronesien, Band 2). Humburg: L. Friederichsen.
- Smidt, D.
2011 Lake Sentani Art: Connecting Ancestors and Descendants, Chiefs and Community. In V-L. Webb (ed.) *Ancestors of the Lake: Art of Lake Sentani and Humboldt Bay, New Guinea*, pp. 22-29. Houston: The Menil Collection.
- Thomas, N.
1991 *Entangled Objects: Exchange, Material Culture, and Colonialism in the Pacific*. Cambridge: Harvard University Press.
- Thomas, N. and D. Losche
1999 *Double Vision: Art Histories and Colonial Histories in the Pacific*. Cambridge: Cambridge University Press.
- van der Sande, G. A. J.
1907 *Nova Guinea, Résultats de l'expédition scientifique Néerlandaise à la Nouvelle-Guinée en 1903*, vol. III: *Ethnography and Anthropology* (Reprinted). Leiden: Late E. J. Brill Publishers and Printers.
- van Duuren, D.
2011 Exploring the Lake: Sentani Art in Dutch Collections. In V-L. Webb (ed.) *Ancestors of the Lake: Art of Lake Sentani and Humboldt Bay, New Guinea*, pp. 30-37. Houston: The Menil Collection.
- Webb, V-L.
2011 Introduction. In V-L. Webb (ed.) *Ancestors of the Lake: Art of Lake Sentani and Humboldt Bay, New Guinea*, pp. 12-19. Houston: The Menil Collection.
- Welsch, R. L.
1998 *An American Anthropologist in Melanesia: A. B. Lewis and the Joseph N. Field South Pacific Expedition 1909-1913* (2 Vols.). Honolulu: University of Hawaii Press.
- Wichmann, A.
1910 *Nova Guinea: Uitkomsten der Nederlandsche Nieuw-Guinea-Expeditie in 1903*. Leiden: E. J. Brill.